

No. 105

2026.3.3

すくらむ

発行所 福井県特別支援教育センター
所在地 〒910-0846
福井市四ツ井2丁目8-1
TEL (0776)53-6574
FAX (0776) 52-6272
E-mail tokuse@pref.fukui.lg.jp
URL <http://www.fukuisec.ed.jp>

- P.1 ・巻頭言「昔も今も変わらないこと」
福井県特別支援教育研究連盟 会長 富坂 秀一
- P.2 ・県特別支援学校「センター的機能」情報交換会
- P.3 ・全特セ報告
・実践研究発表会の報告
- P.4 ・現職教育（高校）紹介
・来年度の研修講座について



福井県特別支援教育センターは、
県立病院関連五機関の4階にあります。

巻頭言 「昔も今も変わらないこと」

福井県特別支援教育研究連盟 会長 富坂 秀一



昭和31年2月に発足した福井県特別支援教育研究連盟は、お陰様で設立70周年を迎えました。これもひとえに会員の皆様をはじめ、関係各機関の皆様のご尽力、ご支援によるものと心より感謝申し上げます。

これを機に、沿革史や当時の研究集録等を紐解いてみますと、そこには一人一人の子どもの特性に応じて、その思いや心の揺れに寄り添う、何十年も前の教師の姿がありました。「不易流行」という言葉がありますが、改めて、時代が変わっても変わらない本質的なものや大切なものがあると感じます。

本校の特別支援学級が、今年度の秋に自立活動の取り組みとして「文化祭」を行いました。子どもたちの得意なこと、やりたいことを取り入れながら学習成果を発表するもので、全校児童が低学年と高学年に分かれてお客さんとして見に来ます。

「①お客さんのことを考える（楽しんでもらう）②失敗は成功のもとと考える ③友達と協力する」という3つのめあてのもと、活動をスタートしました。ある子は「来てくれたお客さんに喜んでもらうためにポケットティッシュをあげたい」と提案。どんなティッシュだとお客さんが喜ぶかという教師の問いかけに「学級の子の絵が素敵だから、それを入れたい」と発展し「宝箱に入れて配る」という他の子どものアイデアも加わっていきます。途中、会場設営や発表内容について意見がぶつかることもありました。その都度「部屋の入り口近くを観客席にして劇をする場所を広くする」「問題が起こったら解決策がないか考える」「緊張している子の気持ちも考える」など、めあてを念頭に置きながら、教師はその子の思いを皆に伝え、皆の思いをその子に伝えます。子どもの特性に応じた役割や居場所を提示したり、全員で話し合うことを繰り返したりしながら着地点を見つけました。

文化祭当日、お客さんが見守る中でハンドベル演奏や創作劇などを披露し、大きな拍手を受けている子どもたちの顔を見ていると、時には衝突や葛藤を繰り返しながらも、まさしく問題解決的な過程を経て一つのことを成し遂げていった活動の意義や彼らの素晴らしさを感じました。

県特別支援学校「センター的機能」情報交換会

今年度2回目となる「センター的機能」情報交換会では、研修の一環として、文部科学省より菅野和彦視学官をお招きし、講義を行っていただきました。

講義「共生社会の形成に向けた交流及び共同学習の推進」

講師：文部科学省初等中等教育局 視学官

(併)特別支援教育課特別支援教育調査官 菅野 和彦 氏

講義の中では、「交流及び共同学習」や「インクルーシブな学校運営モデルの創設」に係る近年の動向や学習指導要領等のポイントとなる記述について、説明がなされました。

発展的な「交流及び共同学習」の先に共生社会の実現があり、そのためには特別支援学校、小中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級といった連続性のある多様な学びの場を整備しておくことが必要だということが示唆されました。また、『管理職のリーダーシップのもと、校内支援体制の機能を強化させること』や、『特別支援学校のセンター的機能をより一層発揮させること』が喫緊の課題であると、お話いただきました。

講義の結びでは、一人一人の教育的ニーズに応じた学びの場を大切にしながら、柔軟で新しい授業や体制構築に向けた取り組みがますます推進されることを期待すると述べられました。



グループ協議

講義後、参加者の先生方が、4つのテーマに別れて情報交換を行いました。各校から様々な情報や質問が出され、それぞれの学校の取組や課題を共有するよい機会となりました。以下に、協議された内容について示します。

A 居住地校交流について

各校の居住地校交流の取組が報告されました。小学部入学時には多くの家庭からニーズがあり、各校で取組が始まるものの、中学部進学後は継続が減少している現状が確認されました。現在の交流は、行事中心で回数も少なく、単発的であることが課題となっています。一方で、継続的にかかわることで相手校や地域からの理解が深まり、保護者の満足度が高い事例も出されました。今後は、交流を共同学習として位置づけ、本来のねらいや成果を双方で共有し、継続的で充実した学びとなるよう、取組を進めていく必要があると話し合われました。



B 学校間交流について

忙しい中で、どのように交流を進めるかが課題であり、教科や行事など重なる部分を活用する必要性を感じている学校が複数ありました。また、相手校に合わせるだけでなく、本校のねらいを共有し、情報交換する重要性にも気づかされました。交流は、内容先行になりがちで、学習指導要領や教科目標の理解不足も痛感したとの声も聞かれました。教育課程の意義を改めて認識するとともに、清水特支校の実践から学び、カリキュラムマネージャーの配置や、カリキュラムマネジメントによる充実を図りたいとの意見も挙がりました。



C 高校生との交流

各校から交流の取組が報告されました。距離が近いほど交流を重ねやすい点や、継続することで理解が深まる点が共通して示されました。特別活動や作業学習を中心に、相手校の目標と本校のねらいをすり合わせながら活動を工夫している事例が多く報告されました。また、高校生の訪問や事業所との連携といった形の交流も広がり、特別支援教育への関心を高める効果が見られたとの報告もありました。一方で、同年代との交流に抵抗を示す生徒への配慮や、授業時間の調整などの課題も挙げられました。



D 地域との交流

各校から、児童生徒の特性や二次障害への配慮、打ち合わせや事前準備の負担、交流が単発的になりやすいことなど、継続的な共同学習の難しさが指摘されました。一方で、交流を重ねることで地域から声をかけてもらえるようになるなど、相手校や地域の理解が深まった事例も多く報告されました。作業製品の販売や地域行事への参加、オンライン交流など、多様な取組が進む中、負担軽減と効果的な交流の在り方を模索しつつ、児童生徒にとって意義ある学びを継続していく必要性が共有されました。



事後アンケートの声



「講義について」

- ・交流及び共同学習の目的やねらいを明確にし、教育課程に位置付ける重要性を再認識しました。
- ・「交流」だけでなく「共同学習」を意識し、双方の学校で目標を共有することが必要だと感じました。
- ・インクルーシブ教育の推進に向け、具体的な実践例や課題を学び、今後の取組の方向性を考えるよい機会となりました。

「グループ協議について」

- ・他校の取組や課題を知り、交流及び共同学習の多様な工夫や可能性を学ぶことができました。
- ・自校でも取り入れられる実践を検討し、交流の回数や内容を見直す必要性を感じました。
- ・交流を「イベント」ではなく、共同学習として充実させるために、目的やねらいの共有、教師間の理解を深めることが重要だと再認識しました。

全特セ協議会報告

令和7年10月30日（木）、31日（金）に第49回全国特別支援教育センター協議会研究協議会（大阪府大会）が開催されました。

大会主題を『一人ひとりがいきいきと活躍できる共生社会の実現～「ええやん」と認め合える社会をめざして～』とし、来賓や特総研の先生方、全国の都道府県や政令指定都市の教育センター指導主事など、約140名が大阪府教育センターに参集しました。

文部科学省講話では、特別支援教育課の生方課長より、「特別支援教育の充実について」との演題でお話がありました。次期学習指導要領改訂について、基盤となる考え方については①深い学びの実装、②多様性の包摂、③実現可能性の確保の三位一体で具現化していくというお話や、特別支援教育については現状と課題について、その課題解決に向けての検討事項や論点についてのお話がありました。また、特別支援学校においては、乳幼児期を含めた相談体制の充実について、センター的機能の発揮が求められていくとのことでした。

記念講演として、大阪大谷大学の小田 浩伸 教授と桃山学院大学の長谷川 陽一 教授よりお話がありました。インクルーシブ教育は、「多様なニーズのある子どもたちが可能な限り同じ場で学ぶことを追求すること」と「個々の教育的ニーズに最も的確に答える指導・支援を提供できる仕組みを整備すること」の両輪の上に成り立つということが示されました。そして、学校においては、基礎的環境整備と合理的配慮が一体となった安心できる集団づくりをしてほしいとお話がありました。

分科会では、「インクルーシブ教育システム推進に向けた特別支援教育センターの役割」として、宮城県総合教育センターの副参事より報告がありました。特別支援教育に関する基礎的及び専門的な知識・技能の習得に必要な研修を組織的・計画的に実施し、教職員の資質と専門性の向上を図ることや、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築を目指し、特別支援教育移管する理解啓発を図ることについての取組が紹介されました。その一つとして、子どもたちのニーズが多様化していることを受け、教育と福祉との連携による研修会が実施されたとの紹介があり、福祉機関との連携や異なる学校の特コ同士の連携が増えてきていることが成果として挙げられました。続いて行われた研究協議では、各地の教育センターの取組みとして、都府県教委との連携、大学との連携、市町村指導主事との連携の中で、研修内容を精選したり、役割分担を検討したりしていることや地域の方々の意見は議会において話されており、議会の内容を研修に活かす必要性があることなどが情報交換されました。

実践研究発表会の報告



参加者の声

令和8年2月9日（月）に実践研究発表会を開催しました。「共生社会をめざしたインクルーシブ教育の取組～多様な教育的ニーズのある子どもたちが生き生きと園・学校生活を送るために～」というテーマのもと、園、小学校、中学校、特別支援学校、福祉機関など様々な立場の方から実践報告をしていただきました。参加者は約60名と、多くの方にご参加いただき、午前、午後それぞれ3つの発表後に、オンラインでブレイクアウトルームに分かれて意見交換を行いました。最後に、福井大学連合教職大学院の荒木 良子氏、笹原 未来氏、南雲 敏秀氏、西尾 幸代氏からご高評をいただきました。

発表1 「こども中心にまなび続ける地域連携」

本人のやってみたいという思いを起点にすること、できない理由を探すのではなくどうしたらできるかを考える、教師の在り方として大切な視点をいただきました。関係機関が連携して子どもを支える大切さを改めて実感しました。

発表2 「教員が主体的に校内研究に取り組む姿を目指した図書・研究部長としての取組」

先生方が「自分事」と捉えられるような仕掛けづくりが必要、という言葉が心に残りました。研究を通して各学部がつながっていくことで、子どもたちへの支援もさらにつながっていくのではないかと感じました。

発表3 「地域で活躍する特別支援教育コーディネーターの育成と支援～インクルーシブ教育の視点での授業づくりを目指して～」

担任特コが個別に配慮する前にクラスでできることを考えて実践し、それをまた別のクラスに還元し、学校全体に広まっていくというのは理想的だなと思いました。

発表4 「大好きな保育者や友だちと思わずやってみたくなる環境づくり～一人一人の好きがポッと光る場所～」

園児一人一人を大切に、環境を整えることで子どもたち同士がつながり、育ち合う姿が見られ、インクルーシブの土台が幼児期から育まれていると感じました。

発表5 「読むこと、書くこと等に困難さがある子どもが生き生きと学べる学習支援について～自己選択を大切にし、自分にとってわかりやすい学習方法を習得するために～」

学校、学級、個に応じた取組と重層的な取組が素晴らしいと思いました。自分で選択することや自分で決めて頑張る子を増やすことが大事だなと思いました。

発表6 「特別支援学級（肢体不自由）生徒の教育的ニーズに応えるために～校内外の連携を通して～」

「その子ができる支援」を考える大切さと、本人の思いを尊重する重要性を改めて感じました。「普通」や「当たり前」は誰にとってのものなのかについても深く考えさせられました。

高校における現職教育の取組紹介

啓新高等学校の取組

啓新高等学校では、年1回校内教職員研修会（特別支援教育）を実施しています。今年度は、11月にインシデントプロセス法を用いた事例検討会を行いました。約60名の教職員が参加しました。昨年度は「発達障がいの基礎知識」として、中学校との違いにより生じやすい困りごと、発達障がいの高校生に起こりやすいこと、二次障がいについてなど講義形式で実施し、そこで知識として学んだことを、今年度は、グループワークを通して教員間で対話しながら深められました。

5分 **ステップ①：事例提供（クラス担任）**
・事例提供者は、インシデント（一番困っている出来事）について5分程度で報告をする。
・参加者は、記録を取りながら発表を聞く。

10分 **ステップ②：事実・情報の収集**
・事例が起こった背景や原因になることを質問する。

10分 **ステップ③：個々で検討**
・背景や支援方法を考える。

25分 **ステップ④：グループワーク**
・自分が考えたことを出し合い、意見を紙面にまとめる。

15分 **ステップ⑤：グループの意見を共有**
・他のグループの意見を聞き、自分の方針と比較する。



ハードルが高いと感じていた事例検討でしたが、活発に意見交換できました！ケース検討に「絶対の正解はない」。だからこそ、教員一人一人の知識や経験を学校全体の財産として共有することが、組織力向上につながります。謙虚に学び続けることが大切だと改めて感じました。

【研修会に参加した教員の気づき】

職員会議で生徒の情報を共有する時間を設けたり、学科コースで定期的にこのような事例検討をしたりして、校内での**情報共有システム**があるといいなと思った。

担任一人で抱え込むことがないよう、スクールカウンセラーなど複数教員で多角的に関わる「**チーム対応**」の体制づくりが必要だと思う。

中学校との連携や申し送りが重要であるが、申し送りなくとも**早期発見・対応**ができるように、入学初期（4月など）の面談が必要ではないかと思った。生徒の思いを聞かずに物事を進めることも多いと反省した。

普段の**生徒観察**を大事にしたい。生徒一人一人を見て些細な変化にも気づいていけるようにアンテナを張るようにしたい。洞察力がないと早期発見は難しいと思った。

もっと**発達障がいへの理解**を深めていく必要があると感じた。常に**最新情報を更新**していくことが、的確な状況の把握・生徒の見取りと教員間や関係機関との連携につながり、支援の輪が広がられるのだと感じた。

グループワーク主体の授業のメリット・デメリットや、発達特性がありグループワークの参加が難しい生徒の授業参加の仕方についてなど、**授業づくり**について改めて考えさせられた。

R8年度の研修講座について

次年度の研修講座は、**9講座の開催**を予定しています。そのうち7講座は県外講師によるZoomを使った**オンライン研修**となっています。以下の講座は、校内研修としてもおすすめです。

No.1「ライフステージを通して考える
LD・ADHDを併存するASD児童生徒への一貫した支援の視点」
神戸大学 名誉教授 鳥居 深雪 氏

幼児期から就労まで一貫して大切な視点と望ましい支援の在り方を学びます。

ADHDの当事者でもある講師の先生から支援者として大切な視点を学びます。

No.5「発達特性のある子どもの「自己理解」を支える支援とは
— 思春期・青年期のかかわりを学ぶ—」
NPO法人えじそんくらぶ代表 高山 恵子 氏

No.6「すべての子どもたちとの「あったかクラスづくり」
— 多様な子どもたちへの対応とは—」
桃山学院大学 人間教育学部 教授 松久 真実 氏

すべての子どもたちが居心地よく過ごせるインクルーシブな学級づくり・授業づくりについて学びます。

発達段階に応じた指導・支援方法、合理的配慮や環境調整について事例を通して学びます。

No.9「その子らしい学び方を大切にして
— 『読み』『書き』に困難さのある子どもの理解と支援—」
立命館大学 産業社会学部 教授 川崎 聡大 氏

詳細は3月下旬以降の『**研修講座 掲示板**』をご覧ください。

（当センターHP▶研修・研究会▶R8年度 研修講座 をクリック）

申込期間：4/20(月)～6/25(木)